
キララノアメ

媛野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キララノアメ

【Nコード】

N9415S

【作者名】

媛野

【あらすじ】

不良少女は恋を知らない。いつからか言葉を交わすようになったバスケット部所属の男子生徒は背が低い。ハムちゃんと言ったりなかったりすることが常なのに、離れていかない彼を不思議にも思わなかった彼女。そんな少女もいつしか、変化の時を迎える。

恋ってあんましょくわかんない。あたしだったらそんなのありえないし、バカみたいじゃん。

夕暮れに染まった校舎を見上げながら、あたしは先輩のヒロサンと喋っていた。話の内容はごくごく普通で、今度何処に遊びに行くとか、どうやって授業を抜け出そうとか、あのおやつが食べたいとか……。

「あゝあ、新しい服欲しーなあ」

見ると、ヒロサンは階段の広場に体を投げ出すようにして寝転がっていた。

「え？ もうですか？」

そう言つて、あたしは踝まであるスカートをたくし上げた。一昔前の不良が着こんだ「スケバン」と言われるもの。それをあたしは好んできている時代遅れの不良ちゃん。笑いたければ笑えばいい。

ヒロサンは鞆からメイク道具一式を引っ張り出し、そのままの体勢で器用に化粧を始めた。

「朝本だつて欲しーでしょ？」

視線だけあたしに向け、ヒロサンは問い掛けて来た。あたしは別に欲しくも無かったので逆に聞き返した。

「ヒロサンだつて、何でそんなに欲しいんですか？」

「え？ そりゃー決まってるでしょ。女が綺麗になるには化粧と服だけなんだから」

そんなもんか。と思いながらアイシャドーを綺麗に塗っていく先輩を見つめた。こうしてみているとそれも説得力がある。

いつの間にか夕日は家々の間から辛うじて覗ける程度にまで沈んでいた。ヒロサンが勢いをつけて立ちあがり、落書きのされた鞆を持って階段を下りていった。6段ほど下りた所で首だけ回して彼女は振り返った。

「じゃ、あたし先帰るわ。朝本はアイツ待つんでしょ？」

「ああ、そういえばそんな奴が……」

あたしものつそりと立ちあがり、ゴミくずを払って転がっているぺしゃんこの鞆を拾い上げた。

「じゃ、ヒロサン、バイト頑張ってください」

ヒラヒラと手を先輩に振り、体の向きを変えて少し離れたところにある体育館へと足を向けた。

「朝本くがんばれよあ」

いきなり変な事を言い出すのであたしは思いきり顔をしかめて先輩を睨み付けてしまった。

「はあああ！！？？」

「ま、気にすんなよ」

「い、いや、気にしますって！」

ヒロサンはあははははと高らかに笑いながら石段を駆け下りていった。あたしはそれを微妙な心境で見送った。

体育館は本館から5分ほど離れた所に位置し、通称第2体育館。あたしはその体育館の裏へと回り込み、草が惨めながらもたくましく生きているその上に、なんの慈悲もなくどっかりと座りこんだ。開いた窓から、体育館の中の音が漏れてきている。それは一定のリズムで弾むボールが何十個分も重なっている音だった。

あたしはいつもの様に鞆から飴玉と行きに買ってきた雑誌を出した。ぱらぱらとページを捲りながら飴を口の中で転がした。カリカリッという音をたてながら飴は口の中に甘い香りと味を広げていく。あたしが雑誌を大体読み終わると同時にすぐ上の小窓が開いた。

「お、いるいる」

「あー？」

いかにも「かったるい」という風を声に滲ませ、頭を持ち上げた。見ると思ったとおり、ヒロサン曰く「アイツ」がそこから顔を出していた。

「ちよつと待つてろ。まだミーティングが残ってんだ」

「へーえ」

あたしはさつさと視線を雑誌に戻し、上空で返事を返した。キユッキュツというバツシユの床に擦れる音がして、誰かが挨拶をする声が聞こえた。

雑誌も読み終わり、日もすっかり沈んだ頃に「アイツ」はへらへらした顔をしてやって来た。

「うおーい」

ちらつと視線を向け、あと2・3歩でというところであたしは勢い良く立ち上がった。

「な、なんだよ」

——バンツ！

あたしは鞆を地面に叩きつけ「アイツ」を睨みつけた。

「いつつもいつつもあんた遅いけどさー。ふざけんじゃねーよ」

「はああ??」

あたしは目の前の呆け面をしたあたしよりも背の低いヤローに舌を出して見せ、鞆を拾い上げて歩き出した。

「お前なー、怒るぐらいなら待つ事ねーだろ？」

と、ばやきながらおチビさんはあたしの後をついて来た。

日も暮れて街灯に光が灯り、アスファルトの道を青白く照らしていた。

「あーあ」

「なに」

珍しく溜息を漏らしたおチビさんを不思議に思っただけ振り向いた。おチビさんはポケットからカロリーメイトを取り出して、頬張って

いた。まるで冬を間近に向かえたハムスターのような……。

「ぷ」

「おい」

ついつい口から出てしまった声に、あたしはあわてることなくそのまま腹を抑えて笑い転げた。

「おい、何がそんなにかしいんだよ。こんの不良ヤロー！」

左手でわき腹を抑えながら、あたしは必死に顔をあげ、声を引きつかせながら答えた。

「あ、はは、不良なんて…こ、光栄で。ぷ。あはははは！」

「こんの、ちゃんとしゃべれっ！！」

ドンツと落合が体当たりしてきたのであたしは足をもつらせ、もう少しでこけるところだった。あたしは棘を含んだ声で落合に言い放った。

「おい、テメー。ふざけんなよ」

「なんだあゝ？不良ヤロー」

青白い光を放つ街灯の下であたしとチビハムスターは火花を散らして向かい合った。

「ちび！」

「不良！」

落合は舌を出して威嚇し、あたしの脇をすり抜けて先を歩いていった。

「こっんのハムスターバカめ！！」

夜の住宅街にあたしのいらついた声が響き、それで振りかえると思った落合はあたしに見向きもせず、そのまま先を歩いて行ってしまった。その背中もほとんど小さくなり、そしてあたしの目の前で闇に溶けていったのだった。

最近、イライラする。あたしは久々に行った美容室で、伸び放題荒れ放題の金髪をばつさりと切り、ショートにした。そしてキャラ

メルブラウンに綺麗に染め直し、ゆるくカールもつけてみた。

「いかがですか？」

「あー、ありがとうございます」

バサツと床に広がった髪を見つめ、軽くなった頭をもう一度鏡で見た。

勘定を済ませて美容室を後にし、ショッピングモールに足を向けた。頭は軽くなったのに、彼女の足取りはいつもより幾分か重いものだった。

せつかく気分転換のために髪を切ったのに。

あたしはシヨウウィンドウに映る自分の姿を見つめ、顔をしかめた。

こりゃ、不良じゃないな。

あたしは引きつるような笑みを浮かべ、石畳にブーツの踵があたつて軽い音をたてた。

最近のあたしは変だ——と思わずにはいらなかった。

「うーわ、人って変わるなあ」

屋上のタンクの傍にヒロサンと向かい合ってあたしは1時間目から授業をサボっていた。

「えー、うそでしょヒロサン。あたしはあ・た・し」

「うつわ、キモイよ朝本」

ヒロサンは真っ赤な口紅が印象的な口をへの字にひん曲げ、1・2歩あとじさりした。あたしは苦笑しながらそれを見て、仰向けに寝転がった。ヒロサンも頭を並べて横になる。

「ヒロサン」

「はいよ」

ゴロンとヒロサンは体をあたしの方に向け、二人は向かい合う形になった。

「あたし、変ですかあ？」

「……変だね」

「え」

「変だよ。そんな事言う自体ありえん」

あたしはその言葉にウソが無いか探ったが、ヒロサンの声音には真剣みが帯びていた。

「ですかねえ」

あたしは半回転してヒロサンに背中を向ける形になった。太陽は薄い雲に覆われて今は見えていなかった。ヒロサンは溜息をつき、あたしの鞆から一昨日買った雑誌を引っ張り出して読み始めた。

ありえないと言うからには本当にありえないのだろう、とあたしは思った。

つまりこれは、いったいどういうことだろうか。

教室に戻ったときにはお昼になっていた。中には数人の男子生徒と大半の女子生徒が机をくつつけてお昼ご飯にありついていていた。あたしは半年間場所が変わらない自分の机に腰掛け、鞆の中から途中で買ってきたお弁当を引っ張り出して、久々に教室で食べることにした。理由はただ一つ。ヒロサンが午前中いっぱい帰ってしまったのだ。あたしにはヒロサンが帰ってしまうと友達らしい奴はいない。と思っただが、一瞬頭に落合の顔がよぎった。しかし、すぐに否定する。

あれは厭くまでちびだし。それにこう見えてもあれって後輩なんだよね……。

あたしは急に憂鬱なキブンになって溜息を一つついた。

メロンパンの袋を破り、長いスカートをたくし上げた。そして豪快に黄色いクッキー生地のパンを頬張る。

あたし、ほんとにヤバイ。このままじゃ精神科行きじゃん。

あたしはもう一つ溜息をつき、早くも次のパンの袋を破った。

「なー。朝本おー」

さつきからちよこまかとあたしの後ろをついてくるのは、あいっ
しかない。あたしは手に持っていた白い紙を手で握りつぶし、拳
の中に仕舞い込んだ。

「なんだよ、ハムスターー!!」

そう、ハムスターこと落合要、その人だ。

「ありえん!!」

「なにが!」

落合はムゥと唸りながら腕を組み、眉をひそめてついて来た。さ
つきまでチヨロリと顔を覗かせていたお天道様は、いつの間にか雲
の後ろに隠れていた。

「お前が髪を切つて、しかも、しかもだぞ!! 不良のお前が、金
髪じゃなくてそのおとなしめの髪の色!!」

ビシツとあたしの髪を指差して指摘すると、また頭を抱えて悩み
出した。あたしは面倒臭くなって手を振った。

そこで悩むか? ふつー。

「あゝ、もうやめろよ」

あたしは剃った眉を寄せてハムスターにしたたかな蹴りを入れた。
落合はグヘツと変な声をだし、肩にかけていたスポーツバッグを
床に落とした。次の瞬間、ハムスターは何かに思い当たったような
顔をして手を打った。

「あ、お前。失恋したんだろ!」

「……」

キョトンと見上げてくる『ザ・バカハムスター落合』をあたしは
呆れ気味に見下ろした——といってもそんなに慎重に差は無いけど。

「ハム公。バカだろ」

「ああ!?!」

「ばーか。あたしが失恋? ハムちゃん。もっと女を知るんだな」

「おい、意味わかんねえ。違うのかよ」

言い寄ってくる落合をあたしはイライラした気持ちで睨みつけ、もう一発蹴りをいれた。落合は顔を歪め、そのまま片足を抱えてピョンピョン跳ねた。そしてブーブーいいながら落ちた鞆を拾い上げてついて来た。あたしはそれを可愛いなと思いながら、少し先を足早に歩くのだった。

落合と別れたあと、あたしは一人で公園の公衆便所前にやって来た。手に握られたクシャクシャの白い紙を真っ直ぐに伸ばし、そこに綴られた文字を見てからその場に投げ捨てた。

ジャリ、という砂の擦れる数人分の足音を耳にして、あたしは顔をそちらに向けた。そこには、腰まである金髪をした女が5人、面を揃えて立っていた。

「なんだよ。あたしに用って」 既に手紙を受け取った時点でわかりきっていたが、あたしはわざと中央に立って仁王立ちする女に質問した。

「わかってんだろ。テメー、抜きたいってどういう事か。なあ、朝本っ！！」

女が肩に乗せていた木刀を振り下ろし、砂地に突き刺した。周りにいる女も同様に身を乗り出して腕を組み、あたしを挑発的に睨みつけて来た。そして女が音をたてて木刀を引きぬき、その切っ先をあたしに向けてきた。

「お前も安西みたいになんのかあ！？ ええ？」

安西って……ヒロサンのことだ。

あたしはにっと口だけ引き上げて笑って見せた。すると、ついに堪忍袋の緒を切らした女が飛びかかってきて、その木刀であたしの肩を殴って来た。他の女もそれに加わり、あたしは周りからあらゆる力の力で殴られた。最初はプライドにかけて抵抗していたが、それもだんだんと億劫になり、激痛で顔が歪んだ。必死にふんばっていた足も、ついに地面に崩れ落ちた。「バカだろ」

どこから女の叫び声にも似た声が降ってきて、地面に伏せていた顔面にきつつい蹴りを食らった。さすがにこれには堪えた。

いつの間にか細かい霧雨が空から降ってきていた。それは次第に勢いを増してゆき、ついに辺りは真っ暗になった。雨が降ってから、5人の女は暫くあたしから離れなかった。すっかり痛め付けられたあたしは声をあげる事も、睨みつけることも出来なかった。そのうち、5人のうち1人の女がゆるりと動き出し、あたしの鞆の中をひっくり返し始めた。あたしはそれをただぼーと眺め、水溜りとなった泥の上に転がっていくのを見ているのを精一杯だった。ケラケラという笑い声が沸き起こり、最後の一発をあたしに一人ずつ律儀に入れていつてから逃げるように消えていった。

やっと終わったなあとぼんやり思いながら、雨にうたれて立ち尽くしていた。

こういうのを総て無くしたというのだろうか。

あたしはゆつくりと泥まみれの鞆を拾い上げ、その周りに転がっているポーチや雑誌を拾い上げた。雨の勢いは弱まるどころかその勢いを増していた。これでイライラもスッキリすると思ったのに……。ムカムカしたキモチは今も尚その胸に小さく燻ったままだった。

「あれ、アサモト？」

あたしは内心深く溜息をつき、こういう時に面識のある奴と会いたくなかったとぼやいた。

「大丈夫か……？」

声のしたほうを見れば、そこにはビニール傘をさしてコンビニの袋を手に掲げた落合の姿があった。

「うるせー、平気だよ。これくらい」

あたしは顔にかかった髪をほらい、泥まみれの鞆を肩に掛けた。

「ホントかよ」

落合は心配そうにあたしの顔を覗きこみ、手に持っていた傘を差し出した。あたしは口元に無理やり引きつった笑みを浮かべ、「あんなにも良いところじゃん。」と皮肉っぽく言い放った。しかし、

期待していた彼のツツコミが返ってくることは無く、後にはしんみりとした空気だけが残った。

「なんでこんな所にいんのよ。ハムちゃん」

あたしは痛む足を無理やり動かして歩き出した。落合も隣をテクテクと歩いてくる。その視線が今のあたしには痛くて、とても冷たく感じた。

「別に。なー、お前さー。喧嘩してたのか？」

「まあね。ボロ負けだけど」

あはは、とあたしは乾いた笑い声をだし、道路に流れ込む水を見つめた。

なんだろう、これは……。これがイライラなのか？

あたし達は暫くの間ずつと黙ったまま歩き続けた。

「アサモト。なんかあったら俺に言えよ？」

ぼそりと言った落合の言葉を、あたしは笑い飛ばすことが出来たはずだが、その時は何故か出来なかった。

あたしは真っ直ぐ前を睨みつけて、何も言わずにその言葉を黙って噛み締めた。

歩道橋を渡りきった所で落合が傘の取っ手をあたしに握らせ、ケロツとした様子で笑みをを見せて手を振った。

「また明日な。休むんじゃねーぞー！」

「え、あ、おい！ 傘はどうすんだよ！！」

落合は駆け出した足を止めて振りかえり「あげる」と言っただけで土砂降りの中を駆けて行き、あたしの前から消えた。

あたしはその小さな後ろ姿が見えなくなるまで見送った。

「はっ、もう返さないからな」

あたしはぎゅっと傘を手が白くなるまで握り締めた。もう少しでこの胸の内のもやもやが晴れそうだった。この雨がいつかは晴れるように、あたしのもやもやもいつか晴れるときがきてくれるだろうか……。

「うはあ。すつごい痣」

あたしは溜息をつき、肩にショルダーバックをかけた。母が心配そうに見てきたが、あたしはそれを睨んで返して軽くあしらった。

学校に着くとあたしは真っ先に屋上へ向かった。ぎしぎしと古い既に錆びてしまったドアノブを手で回して押し開け、外に出た。空いっぱいには敷き詰められた暗い雲が一番に目に飛び込んで来た。そして飴をなめながら携帯でメールを打つヒロサンの姿も……。

「あ、はよう」

ヒロサンはニカツと笑い、白い歯が見えた。あたしは曖昧な笑みを返し、彼女の隣に荷物を投げ出して寝転がったので、今まですっかり忘れていた昨日の傷が鈍く疼いた。ヒロサンがじっと見てきていたが、何も言わずにメールを打ちに戻った。カチカチという細かい音と、周りの雑音だけが静かに響いた。

「ヒロサン」

「なあに？」

あたしは寝転がったまま、鞆から新しい雑誌を引っ張り出して言った。

「あたし、“族”を抜けました」

カチカチという爪が携帯のボタンに触れる音が、無機質に響いて聞こえた。チラと様子を窺うと、先程と同じ姿勢・表情で先輩はそこに存在していた。

「やつぱり、抜けなければよかったですね……？」

急に心配になってあたしは言った。すると、ヒロサンは動かしていた指を止め、あたしをまっすぐ見つめてきた。

「いんや。朝本がやめてくれてよかったよ。あんたが“族”を抜けない限り、あたしはあんたを通して“族”と繋がっている事になるからさ。これでスッキリしたかなあ、あたし的には」

ヒロサンは伸びをして、仰向けに転がった。あたしは真っ直ぐ鉄の手摺を見つめていた。

「それにさ」

ヒロサンが携帯をポケットにおもむろにしまいこんだ。

「これで朝本は1年の有余が出来たたる？」

「有余？」

あたしはビツクリして先輩の顔をまじまじと見てしまった。先輩はにっこりと笑って手をヒラヒラと振って見せた。

「あたしは遅かったのよ。今年の初めに抜けたの。だから勉強にはついていけないから高卒だし。就職は出来ないし、大学にもいけないでしょ？ 将来が目に見えるようだよ」

ふつと表情を崩した彼女の顔は、相当悩んだ事が伺えた。ヒロサンがこんな事を思っただけで今までここにいたなんて、と半ば信じられずにあたしはいた。ヒロサンはまた顔に笑みを浮かべて「だから」と言葉を続けた。

「朝本はこの機を境にしてがんばんな」

ヒロサンの言葉に、あたしは目を疑った。

「あたしが…ですか？」

「そうそう。朝本、あたしの分もがんばれよ」

「ええ！？ ムリです！！」

「んなことないだろ」

ヒロサンは軽く笑い飛ばし、あたしの背中を思いつきし叩いた。

あたしはその衝撃が昨日の傷にあたって息を詰まらせた。ヒロサンが苦い顔をして「ごめん」と口にした。

あたしはそれでもなんとなく今までの事に整理をつけてみようかと思った。別に不良がどうとは思ってもいいし、やろうと思えば勉強だってしても良いと思っていたのだ。ヒロサンもこうしてあたしの後押しをしてきているのだから、今までの生活に区切りをつけることも悪くない。そう思うと、あたしは急に今までの事がおかしくなって笑い出した。

あたしは早速スカート丈を直しにお店にそれを出し、代わりに（校則違反だけど）チェックのスカートを履いて登校した。これはさすがに周りの生徒の目を引いたらしかった。あたしはそそくさと校庭を横切り、体育館裏へと回った。体育館裏は針葉樹の木が均等に並んでいて、適度に朝日を遮っていた。あたしはその中を速足で進み、朝っぱらからイチャイチャしているカップルを無視して進んだ。

「あ」

「いたいた」

あたしはほつと息をつき、壁に寄りかかっていた人影に手を振って見せた。

「はい。これやる？」

その人は手に抱えていた袋を差し出し、中を見せてきた。そこにはクリーニングに出したばかりらしい規制のスカートが綺麗に入っていた。あたしはお礼を言ってそれを受け取り、彼女の肩を叩いた。

「凜。あんがと。一週間くらい借りるわ」

「ええよ、そんぐらい。私、どうせ卒業してるから使わへんもん」

あたしはもう一度お礼を言っただけで彼女と別れた。

体育館裏を出ると、落合と擦れ違った。あたしは一瞬足を止め、息を呑んだが、彼は全く気付く様子も無く歩いて校舎の中に消えていった。人というのは、スカート一つで変わるのだ。全然意味わかんないけど。

あたしは女子更衣室にお邪魔して、その場を借りてスカートを履き替えた。久々にはく膝より少し短めのスカートは、なんだか気恥ずかしかった。あたしは苦笑いを滲ませて鞆に履いてきたスカートを突っ込み、教室に向かった。朝から授業を受けるのは1年半ぶりだ。あたしの気分は意外にも清々しかった。

放課後になって、あたしへの皆からのありもしない噂を総て取り消す事に成功した。勉強は思っていたとおりサッパリわからず、適

当な人に聞いて何とか追いつこうと努力したが、英語や数学の学力の差はやはり大きかった。

「朝本さん」

クラス的眼鏡スター町子ちゃんがあたしを大声で呼びつけた。あたしは今までの習慣で、咄嗟に身構えた。“族”の先輩が来たのかと思ったのだ。しかしその考えは町子ちゃんの背後から現れた影によつてチリとなった。

「よう、不良……」

顔を出した落合は微妙な顔をして立っていた。あたしは蹴りを入れようと思つて動いたが、スカートが短い事に気付いてやめた。

「…マジ…?」

落合が、頬を引きつらせてあたしを見上げて来た。

——ん? コイツ、背伸びてやがる。

あたしは目の前に立つたハムちゃんを見てうなつた。落合はバツシユを指に引つ掛けてそれを肩からぶら提げていた。

「ハムちゃん、これから部活あんの?」

「口は変わらないのね」

「何か言つた?」

「いえいえ」

あたしはシヨルダーバッグを肩にかけ、眼鏡スター町子ちゃんに挨拶を言つて廊下に出た。落合はいつもの様に後をついて来たが、いつもの様に突つかかつては来なかった。振り向いて見ると、最初見たときよりもつと微妙な顔をしてあたしを見てきていた。

「何よ」

「いや、きもちワリーなあと思つて」

「は!?! なんだつて?」

あたしはぴたりと歩みを止め、面と向かつて睨みつけた。落合は一瞬怯んだが、気を取り直すとあたしの脇をすり抜け、先に歩いて行つた。あたしは彼の後を追う事はせず、その後ろ姿を睨みつけていた。いつも後ろをついてきていたのに、と何故か寂しい思いをし

て、あたしも歩き出した。

いつもの様に体育館裏に来て落合の部活が終るのを待っていたが、ちよつと気になって網の張つてある小窓から中を覗いてみた。中はいつもの様に部活に励む生徒が何十人もボールと打つて、軌道や癖などを確かめていた。あたしはそのまま視線をぐるりと回し、開いている扉のところに固まつている女子生徒たちところで止まった。今までこうしてよく見た事も無かつたので、あそこに沢山人がいるとは思つてもいなかった。あたしは少し行つて見たくなくて、地面に置いていた鞆を拾い上げて場所を移動した。

あたしが表に回つてみると、その人数は思つた以上に多かつた事が判明した。少し気が引けたが、変なプライドがそれを許さなかつた。すばやく人垣をすり抜けて中に入ると。体育館の二階席は垂れ幕をもつた女子生徒で既に溢れかえつていた。あたしはあからさまに顔をしかめて見せ、その五月蠅さに溜息が出た。あたしは一番端の目立たないがよく見える窓際で落ちついた。もともと長居する気は無かつたので、鞆は持つたまま窓の棧に背を預けた。

暫くしてから、これから練習試合があるのだとわかつた。対戦校の青いユニフォームと、この学園の白いストライプのユニフォームが向かい合わせに並んだ。一人一人の顔を見ていつて、あたしは目を疑つた。確か練習試合はレギュラーが出れるものだったはずだ。なのに、その中に著しく背の低い落合の顔があつた。あたしは思わず口をあけたままその顔を穴が開くまで見つめてしまった。

主審の合図で、試合は手順通りに始まつた。女子軍は試合が進むに連れてその熱狂ぶりは高まり、今では叫んでいるも同然だった。あたしは半ばバカらしくなつてポケットから携帯を取りだし、ヒロサンにメールを打つことにした。

「あ——！！！」

相手チームの選手が声をあげてそのまま固まつた。放たれたボー

ルがくるくと回転しながらゴールを過ぎた。それはスピードを緩めることなく弧を描いて降下してきた。あたしは出来あがった文章にもう1度目を通し、メールの送信ボタンに指をかけた。

「朝本！ よけろっ！！」

「——は？」

——ぴ。

とメールを送信するボタンが押された音がした。あたしは顔をあげて、すぐ傍にボールがきている事をただ呆然と見つめていた。あれに当たると、人に殴られたときより痛いのだろうか…？と思った。目の隅に、誰かの影を捕らえたが、それはボールへの興味より薄かった。ぬっ、と横から伸びて来た手にあたしは初めて危機感を覚えたぐらいだった。

ボールの跳ねる音がして、外の雑音が戻ってきて、あたしには正常な感覚と思考が戻って来た。

「大丈夫か？」

何度か瞬きをして、目の前にある存在を確認した。

「あ、落合じゃん」

口から咄嗟に滑り出て来た言葉に我ながら苦笑した。落合は大丈夫かよ、といつもとは違う雰囲気をもった笑みを見せ、あたしの肩を叩くと、何時の間にか落としていた携帯を拾って渡してくれた。

「あ、どーも」

「ぼーとしてんなら裏にいろよ。あぶねーだろ？」

落合はそう言っただ歯を見せて笑うとコートに戻っていった。あたしはその後ろ姿をじっと見つめ、その時ヒロサンからメールの返信を受信した。

——朝本。あたし、やっぱり中退するかもしれない。今いる彼氏について行くよ。でもそれは、あんたのせいとかじゃないからね。

あたしには、少しわかったことがある。それは、ヒロサンのキモチとあたしの今のキモチはすこし似ているんじゃないかって事。あ

たしは腕を組んで悩みながら、珍しく落合に遅れをとって歩いていった。今日の練習試合は落合のチームが圧勝する結果で終わった。だからなのだろうか、目の前にいる落合の後ろ姿が――

「眩しすぎる？」

「…何いってんの」

あたしは目に手を翳しながら振り向いた落合を見つめ、それからぼんやりと目の前に続くアスファルトの道を眺めた。そして、ヒロサンからのメールの続きを思い返し、少し先に行く落合を見た。

――PS・あなた、落合のことが好きなんじゃないの？　あんなって、結構鈍いみたいだから自分の気持ちにぐらいそろそろ気付いても良いんじゃない？　by・安西　ヒロ

その時、穏やかな季節風が周りに植えられている木の葉を揺らし、ついでにあたしの胸に突っかかっていたモヤモヤを拭い去っていつてくれたようだ。あたしは、改めてカロリーメイトを頬張る落合を見て、微笑んだ。

あたしは、コイツのことが好きみたい。

だけど、あたしはそれを上手く理解する事ができなくて、でも、初めて人を愛しいと思えた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9415s/>

キララノアメ

2011年5月4日20時10分発行